

里山の温故知新と里山エコビレッジ

糸長浩司

日本大学生物資源科学部教授

持続循環型社会構築のために、里山文化の温故知新

21世紀の世界的目標として持続循環型社会が叫ばれている。異状気象が頻繁に起きている昨今、地球環境と共生した持続可能なライフスタイルの構築、そして、その具体的な人間居住環境像とはどんなものかが問われている。そして、日本でのその具体的な解答が求められている。私達が生き続けるために必要なものは、新鮮な空気、水、健全な自然環境、生きるための食糧、暖房や動力、移動の力となる自然エネルギー、そして、仲間・コミュニティ、そして、我々の安寧な精神の持続性である。それらのものが生活の身近な範囲の中で、持続的に確保されることが、安心安全な暮らしの基本となろう。持続循環型社会とは、この基本的要素を人々が暮らす地域というベースで持続的に確保し続けられている社会である。人間が自らの持続的な暮らしの場を、自分たちの生活する拠点を中心として構築していくことが、その出発点であり、到達点となろう。地産地消、自立・循環的暮らしを生活している場である地域で、共同で構築することである。

世界的にも、「パーマカルチャー」（生態系を生かした農をベースとした永続的な生活文化創造）、「エコビレッジ」（持久性の高い自給自足的な共同性の高い居住地）、「バイオリージョナリズム」（人間を組み込んだ地域生態系の元に地域での持続的暮らしを考える思想）等の理念に基づき、地域内での資源循環利用による持続性、自給自足性、共同性の考えに基づく地域づくりが、地球環境問題解決の方法として取り組まれてきている。このような世界的、地球的背景の中で、日本独自の「里山文化」を再考し、里山にある自然、風土、歴史文化の特性を生かした、日本型の持続循環型社会構築の展望を考える。

縄文と弥生の文化融合としての里山

農村の土地利用構成の基本的形態は江戸時代にほぼ完成している。民俗学では、家のある「サト」を中心とし、前面に「ノ」、「ハラ」、「サト」の裏には「サトヤマ」、「オクヤマ」が構成された。奥山・里山からの水系が里、畑、田に至り農業や生活に利用されている。この奥山～里山～屋敷～畑・田にいたる農村集落土地利用の連続性は、農村集落のもつ土地利用の秩序性であり、その秩序性が農村集落の景観的な美しさの構造であり、農村生活の持続的な自給自足性を保障していた空間的構造である。

里山は原生自然ではない。人間が長い年月をかけて深く関わってきた自然、二次的自然である。人間が、生きるための糧を得ること、あるいは建物の用材を得るため、燃料を得るため、水を確保するため等で、利用し続けてきた身近な自然である。人間の管理・利用し、育ててきた自然である。従って、人間の定期的な自然への錯乱という管理・利用行為が実施されることで、その自然は人間との関係性の上に生きてきた自然である。「人間自然生態系」とでもいうべき自然である。あるいは、「農林業生物」という言う方もある。人間が下草を刈り、枝を落として、春の明るい里山を維持し続けることで、そこにはカタクリのような植物が生き続けるところができる。あるいは、水田のために里山に貯められたため池には、トンボが棲息し、水生植物が繁茂する。これも、人間が、身近な自然に対する働きかけをしてきた結果である。

このような自然と人間の共生関係、関わりの関係の代表的な場として里山がある。それは、縄文の時代からの歴史がある。有名な山内丸山遺跡の集落周辺では、大規模な栗栽培林の存在が、環境考古学の実証的研究から指摘されている。縄文の人々が集落の周囲の食べられる有用な森を意識的に栽培していた。単なる自然からの幸を採取するのではなく、意識的に自然を創造してきた。有用な自然をデザインし、創作してきたといえる。その後の水稲稲作文化の普及により、里山は水田稲作の貴重な水源地域であり、また、里の暮らしのための、建築物の用材、燃料等の確保の空間ともなった。里山は、縄文と弥生の融合した空間としての歴史文化的な価値をもつ。暮らしの持続的な場づくりのために、暮らしに必要な糧、水、エネルギーを得るために、日本は長い期間をかけて里山や水田という農林地を、デザインし、創作してきた。里山は、日本人が時間をかけて構築してきた、「自然と人間の持続共生空間」として、世界遺産に匹敵する価値を今日的に持っている。この里山文化、里山暮らし文化のエッセンスを、我々は、21世紀の持続循環型社会構築のための、一つのモデルとして再認識すべきである。

図 里山 - 屋敷 - 水田 - 河川に至る連続的土地利用構造

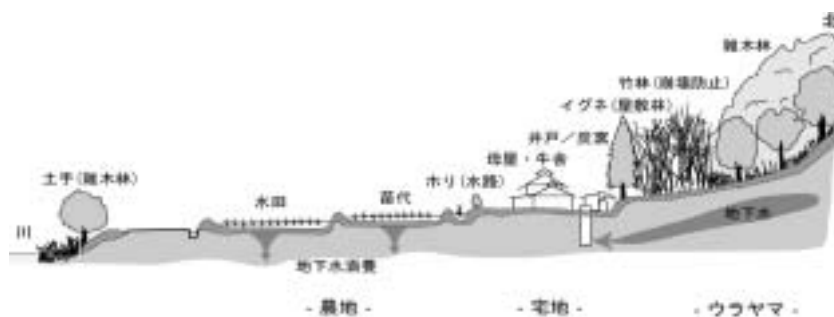


写真1 京都美山町の伝統的な里山集落風景

共同労働によって支えられてきたコモンズ空間として里山

里山空間には、入会林、共同の茅場等がある。集落の共同の労働により利用、保全、管理されてきた空間である。集落に暮らす人達の日々の暮らしを支えるための共同の空間と

してあった。燃料としての薪を共同で利用し、山菜採り、屋根のふき替え用の茅刈り場として、一定の村のルールによって維持されてつづけてきた空間である。それらの共同労働は、「結い」と呼ばれ、里山空間だけでなく、集落の共同空間を維持していくための共同労働として位置づけられてきた。英国のコモンズ空間とも共通するものである。

また、里山と集落居住地の境には、「山の神」が設置され、共同の森への畏敬とそれを維持するための共同精神的シンボルとして、「神」が安置されていた。そして、山開きという共同利用の季節的開始時には、祭りが行われた。山の神、水の神、田の神という、農村での自然の恵みに対する持続的感謝の気持ちと、それを共同で維持し続けるための、共生の意識が、季節的祭りの形をとり、維持されてきたといえる。それは、里山文化といえるものとなっている。生活が近代化し、生活の糧を外部に求めることが拡大した結果、農村地域でも、身近な自然への畏敬と感謝の気持ち、その資源を持続的に維持し続けてきた共同労働の価値が薄らいでいる今日、里山空間の価値を再度見直すことが必要となっている。

東北には、草木塔という伐採樹木に対する感謝の気持ちを込めて石碑が里山近くの神社に多く見かける。里山資源に対する感謝と自然の恐れに対する鎮魂の意味がそこには込められている。森林資源を破壊的に伐採すれば、その麓集落に災いが怒ることを恐れる気持ち、また、身近な森林資源からの多くの恵みを得ることのできることで、自然に触れることで癒される思い等、自然を感謝する気持ちが込められている。自然を持続的に活用していかなければ成立しなかった農山村地域での暮らし文化は、改めて、地球環境時代の今日、地域での持続循環型社会構築にとっての、里山文化の精神的側面として評価する必要がある。

里山エコビレッジづくり

日本の森林の4割以上は集落に近い里山的森林である。そして、日本は、13・5万の集落がある。このように居住地に密着した森林空間が多く存在する先進諸国は日本以外皆無である。日本は長い年月をかけた維持してきた有用な自然の宝庫である森林資源が里山として身近な領域にあるのには、それを現在十分に活用できないままにあることは非常に残念である。21世紀の大きな目標として、この集落近傍の里山を活用した持続循環型コミュニティとして、「里山エコビレッジ」構想を筆者は提案している。

先に述べたように世界的なエコビレッジの運動の中で、日本の農村地域での解答は「里山エコビレッジ」づくりあると考える。山形県飯豊町では山村地域での財産区有林を活用した木質ペレット生産による木質エネルギー自給型での「エコビレッジ型地域づくり」を筆者らが参加し事業化に向けた具体的な検討が、行政、地元住民で始まっている。環境・エネルギー・経済の好循環を目指した取り組みとして環境省の支援も得ている。都会の子ども達が森林環境を学ぶ場も設置され、体験学習を含めたエコライフ学習の場として、「エコビレッジ型地域づくり」の展開が期待されている。

里山エコビレッジには多くのバリエーションがあろう。基本は、集落近傍の里山、農林的資源、歴史文化資源を活用した、持続的な自給自足型共同的暮らしの実現にある。その担い手は、既存の集落住民であり、また、それに賛同する交流都市住民、移住都市住民達である。新しい共同の形態、共同の労働によって、新しいコモンズとしての新里山を活用した里山エコビレッジが構想される。筆者の研究室では、神奈川県藤野町篠原集落が自らNPO組織を結成し、里山、農地、廃校を活用した自然体験学校づくりの活動を支援している。その集落にはNPO法人パーマカルチャー・センター・ジャパン(筆者が代表理事)

や芸術家も移住しており、今後、これらの多様な主体との協働による「学びの里山エコビレッジ」づくりが展開していくものと期待している。



写真2 自然学校を始める神奈川県藤野町篠原集落の里山風景



写真3 篠原集落での伝統的炭窯づくりWS



写真4 篠原集落での炭焼きWS風景

一般的な里山エコビレッジの空間構成は次のようになろう。住宅ゾーン、移動ゾーン(自転車、散策路)、コミュニティゾーン(コモンハウス、コミュニティガーデン、ため池(水源)、植物汚水浄化池)、交流ゾーン(宿泊施設、講義・実習棟等)であり、その他、居住ゾーン周囲には農産物生産ゾーンが形成され、エコビレッジ内の主要な食糧を生産するゾーンである。水田、畑、果樹園、放牧地があり、日頃よく使う野菜や、家禽類は居住地内におけるプライベート・エディブルガーデンが設置されている。居住地ゾーンの背後には、里山ゾーンが形成され、エコビレッジ内での必要な木材や林産物資源、燃料となるチップ等が持続的に生産されるだけでなく、里山エコビレッジの重要な保水空間として、ため池も設置される。また、憩いと癒しの空間としても機能する。自然環境ゾーンは里山空

間にあるが、居住地ゾーン、生産ゾーンの中にくさびのように入り込んでおり、身近な生活の中で十分に自然環境を享受できる。野生の動植物とのふれあいや河川等での水とのふれあいの場もある。

里山エコビレッジづくりにはどのような人々が参加するのであろうか。農村地域の住民、環境共生型の暮らし志向派の都市住民、エコビレッジ内で環境事業、「エコビレッジ塾」等の環境教育や農林業の事業を起す人達（個人経営やワーカーズ・コレクティブ方式等多様な事業形態）、定年退職したエコライフ志向派の人達、週末や定期的に訪れる半定住型の住民と、「エコライフ塾」に参加する人達であり、彼らは、実際にエコビレッジ内の環境維持活動のサポーターとなる。里山エコビレッジの運営は、NPO法人や、協同組合方式での協同運営が望ましい。経済的仕組みとしては、里山エコビレッジで通用する里山エコビレッジ通貨を採用してもよい。里山エコビレッジとつながる流域的な地域通貨との併用があってもよいであろう。

農村にある里山空間を新しいコモンズの間として持続的に活用し、循環型社会構築のためのモデル的拠点居住空間として、ここに里山エコビレッジ構想を提案した。

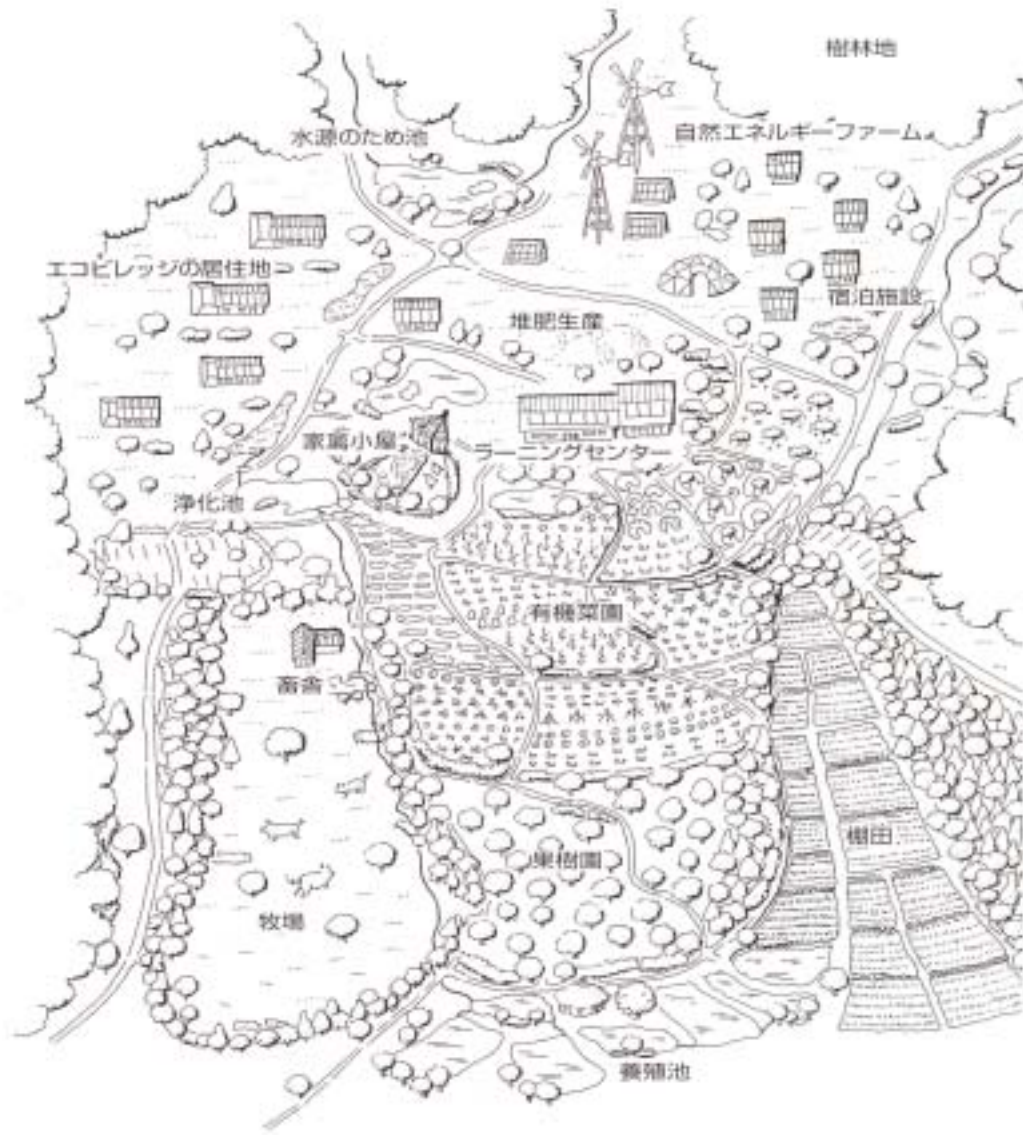


図2 学びの里山エコビレッジ構想図